



プロフィール

1957年、新潟県生まれ。東北大学で国語学を学び、大学院の博士課程に進みました。1983年、国立国語研究所言語変化研究部に研究員として着任し、日本語の方言文法について全国800地点を調査した『方言文法全国地図』を作成しました。1994年から東北大学に勤務し、大学院文学研究科日本語学講座の助教授を経て、現在、同講座の教授を務めています。専門は方言学で、特に、方言の視点から新たな日本語史の構築をめざす「方言学的日本語史」を提唱し、研究を行っています。その業績により、1986年には第11回「金田一京助博士記念賞」を、2004年には第23回「新村出賞」を受賞しました。また、『シリーズ方言学』全4巻(2006～2008年、岩波書店)、『ガイドブック方言研究』(2003年、ひつじ書房)、『ガイドブック方言調査』(2007年、ひつじ書房)などの出版により方言学の体系化をめざすとともに、「週刊ことばマガジン」(東日本放送)、「知ったか仙台弁」(東北放送)などの番組を通じて方言学の普及を行っています。

研究内容

◇方言学的に日本語の歴史を解明

文献中心の従来の研究に対して、方言学的な立場から、地理的・位相的に幅広い視野をもった日本語史の解明をめざしています。

そもそも、私たちが学ぶ古い時代の日本語は『源氏物語』や『枕草子』といった文学作品を資料とするもので、中央の貴族や知識人たちが文章を書くために使ったことばです。しかし、そうしたことばが過去の日本語のすべてではありません。そこで、方言を探索することで、文献の陰に隠された庶民の話しことばの歴史を掘り起こす研究を行っています。

また、古い時代の日本語は決して死に絶えたことばではなく、中央から地方へ伝播することで、今でも各地の方言となって生きています。過去の中央語がどのように変容して各地の方言に生まれ変わっていったのか、そのメカニズムについても研究を行っています。これらの成果は、『方言学的日本語史の方法』(2004年、ひつじ書房)や『方言が明かす日本語の歴史』(2006年、岩波書店)にまとめました。

ところで、そのような研究を行うためには、日本全土に及ぶ組織的な方言調査が必要になります。ここに掲載した地図は、現在取り組んでいる全国2000地点調査の中から、失敗したときに発する言い方を示したものです。「しまった!」のような、叫び声に近いことばにも地域差が存在し、日本語の歴史を映し出していることがわかりつつあります。

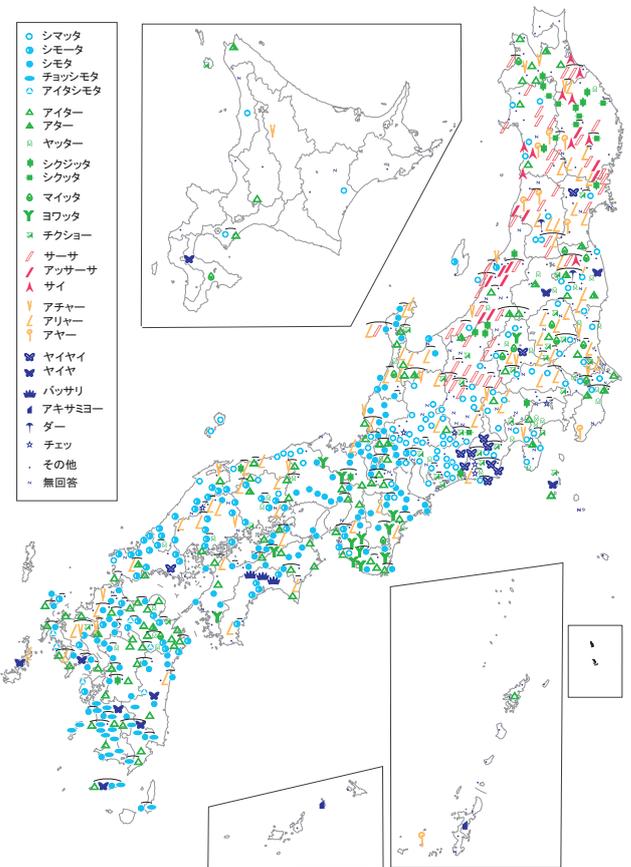
メッセージ

◇みなさんも一緒に、方言の記録に取り組みませんか?

文献からは見えない日本語の歴史が存在するとか、「しまった!」のような驚き方にも地域差があるなどといったことは、ほとんどの人たちが考えもしなかったことです。いわば常識になっていることを疑ってかかるところに、新たな発見への第一歩があり、研究の楽しみも生まれます。

ところで、私の研究対象である方言は文化遺産のひとつであることは明らかなのですが、あまりにも身近な存在であるために、多くの人たちがその大切さに気づいていません。しかも、日本の伝統的な方言は今や共通語化の波に洗われ、消滅寸前の状況に追い詰められています。方言を記録し、後世に伝

「しまった!」(質問文:失敗した時に思わず口にする言葉は何ですか?)



えるために残された時間は、もうそう長くはないのです。危機感をもつ研究者たちは、各地で記録作業に乗り出しています。私も、上記のような全国2000地点調査を行うほか、学生たちと一緒に、毎年、東北地方の方言調査に出かけています(東北大学方言研究センターホームページ <http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/>)。

願わくは、みなさんにも地域の言葉に関心をもってもらい、方言の記録に参加していただきたいと思います。どんなに小さな取り組みであっても、後世への貴重な記録となることはまちがいありませんし、そこから研究上さまざまな発見が生まれる可能性は十分にあるのです。